

〔翻 訳〕(Übersetzung)

オリヴァー・ヤールアウス
「ディコンストラクション（脱構築）
記号—観点の位置ずらし：手紙から判決へ、
ゲオルクから友人へ。
ポスト構造主義的/
ディコンストラクション的視点から見た
カフカの『判決』」(1)

(オリヴァー・ヤールアウス/シュテファン・ノイハウス編
『カフカの《判決》と文学理論 10種類のモデル分析』所収)

六 浦 英 文 訳

「一つも意味はありません」(Es gibt keinen Sinn)—手紙と判決

「あなたは『判決』([*Das*] *Urteil*)に、なにか意味(Sinn)が、つまり直接の(gerade[]), 筋の通った(zusammenhängend[]), 脈絡のある(verfolgbar[])意味が見つかりますか? ぼくには見つからず、そのなかのことはまた何も説明できません」(F 394 [F=『フェリーツェへの手紙』*Briefe an Felice Bauer*])。このように、カフカ(Franz Kafka)は、ある手紙^{訳注1)}の中で、文通相手である婚約者のフェリーツェ・バウアー(Felice Bauer)に問いかける。そして、ほどなくして、カフカは、簡潔に、『判決』は説明できない」(F 396)と述べる。ここでカフカは、意味を解釈しなければならない場合の特徴(Charakteristika)を、非常に的確に述べている。すなわち、意味は、直接の、筋の通った、脈絡のあるものである、ということである。意味は、それ自身において同一のものであり、矛盾を含まない(「直接の」)ものである。意味は、テキスト(Text)を、「筋の通った」全体、つまり作品(Werk)であることを証明する。そして、結局、意味は、テキストを理解可能なものとするもののことである。こうして初めて、意味は、受容を可能にする。それゆえ、意味は「脈絡のある」ものとなる。

1) [訳注] 1913年6月2日付フェリーツェ・バウアー宛て書簡。

カフカは、意味の中に、直接的 (gerade) 意味と非直接的 (ungerade) 意味とのあいだに区別があると見てるように思われる。カフカは、テキストには直接の意味はないかもしれないと主張することによって、他の、非直接的な意味の探索を、直接的に、特に徹底的に行う。直接の意味というものは、解釈学派の解釈¹⁾の成果かも知れない。反対に、非直接的な意味とは、意味の転覆破壊であり、直接の意味という解釈学的表象からの別離である。

意味 (Sinn) と意味のようなもの (d[as] Sinnhafte[]) というこれら確定的な基準のすべての否定、そして、意味による意味の転覆破壊 (Subversion von Sinn durch Sinn) という現象への方向転換は、まだ粗削りであるが、ディコンストラクション (Dekonstruktion / déconstruction / deconstruction / 脱構築)^{訳注2)}——この造語は、特に、ジャック・デリダ (Jacques Derrida) によって展開されたものである——が問題となることを、要約している。ディコンストラクションは、そのような意味を否定することによって、理解の可能性一般を疑問に付する。したがって、カフカが、手紙の中で述べ、実証し、自分のテキストを成就することによって、ディコンストラクションの文学上の主導的人物になったことも、不思議ではない。つまりそれは、解釈の解釈不可能性を示すのであり、まさにそれゆえに、——ヨッヘン・ヘーリッシュ (Jochen Hörisch) が言うように——「理解という怒り」 (Wut des Verstehens) を呼び起こしたのであった。

ディコンストラクションそのものも、この効果の支配下にある。すなわち、いかなる立場も、直接の意味に対しては、ディコンストラクションほどには批判的な関係を持つてはいないのだが、しかしまた、いかなる立場も、意味の転覆破壊の過程で、ディコンストラクションほどには強く意味に関連づけられてもいない。ディコンストラクションは、テキストそれ自体の意味の転覆破壊を、自分のこととして感じ取り、わかりやすいものにする実践として理解される。まさにカフカのテキストこそ、ディコンストラクションというこのような文学概念を実践において例証しているのである。カフカのテキストは、文学となったディコンストラクションなのである²⁾。さて、原理的な文学は、ディコンストラク

1) [原注] この論集のロルフ・ゼルプマン (Rolf Selbmann) の寄稿論文を参照せよ。

2) [訳注] 脱構築 (déconstruction) : 「西欧哲学の二項対立的思考構造を批判し、外へ開かれた立場を模索する。

フランスの哲学者デリダの提唱した概念。彼は、ハイデガーが『存在と時間』(1957) で用いた Destruktion (破壊) のフランス語訳として独自にこの言葉を用いた。デリダによれば、ハイデガーの Destruktion は単なる伝統的思考構造の破壊ではない。それは、西欧哲学が自明とする立場に深く分け入り、徹底的に破壊し、それが隠蔽し排除してきた部分 (奥深く沈殿していたもの) を明るみに出すことである。西欧哲学の根底をなす二項対立的な考え方、〈善と悪〉〈正常と異常〉などという立場を、あくまでも西欧哲学の内部から徹底的に批判し、自明とされて疑われない諸々の思想構造を疑い、外部への開かれた立場を模索しようとする哲学的立場である。1970年代にアメリカでイェール大学を中心に文芸批評の領域で脚光を浴び有名となった。一方、疑念の通俗化とともに、すべての価値に懐疑的立場をとり、決定不可能な立場をとるニヒリズムとして保守派から批判されている。」

(今村仁司・三島憲一・川崎修編『岩波社会思想事典』 岩波書店 2008年 225ページ以下)

ションのプロセスを追跡できる、見本のような模範的な場（Feld）なのである。ここでは、ディコンストラクションは、常に、記号の意味のディコンストラクションであることが、特別な形で明確になる。文学に関しては、ディコンストラクションは、コンストラクション（構築）と、記号についての意味構築のディコンストラクションとが——この場合、〔表現するものと表現される意味内容との間の〕意味作用（Signifikation）についても語られている——手を組むプロセスを優先的に記述する。

カフカのテキストは、一見すると、意味喪失のテキストと思われるかもしれない。だがそれよりはむしろ、カフカのテキストでは、意味そのものの可能性と不可能性の問題がはるかに重要である、あるいは秩序の問題、すなわち秩序の変形と秩序の解体がはるかに重要であるのだが、そのことを認識するためには、ディコンストラクティブな目（ein[] dekonstruktivistisch[es] Auge）が必要なのである。これの意味するところは、特に、家庭的な諸秩序、エロチックな諸秩序、経済的な諸秩序のことである。危険に陥る婚約、問題視される息子の経営管理、そしてとりわけ重要なのは、父と息子との関係である。この関係は、父親によって下され、息子によって受け入れられる死刑判決にいたって先鋭化する。

これらの諸秩序はすべて、つねに、記号秩序としても理解できる。そして、秩序の解体は、つねに、記号プロセス、すなわち記号の意味の解体としても描かれる。しかし、解体に伴って意味の新構築が行われる。組織系統化された体系の中での記号の意味作用（Signifikation）は、意味の基盤（ある概念と、その概念と関係のあるものが、一義的に関係づけられる）であり、解釈と解釈可能性との前提である。しかし逆に、意味作用の破壊は、まさに解釈を挑発する。そして、ディコンストラクションの主たる特徴は、まさにこの現象に向けられていることである。

テキストが、かなりの程度、一定の記号構造（Zeichenstruktur）に根拠を持つ二つの明確に基礎づけられた発言諸形式（Äußerungsformen）ないし発言諸定式（Äußerungsformeln）によって構成されていることは理由のないことではない。すなわち、初めに手紙があり、最後に判決主文がある。そして、両者には互いに関係がある。すなわち、手紙が描く状況は、父の判決主文によって、もしかすると最悪の方法で、ふたたび廃棄される。しかし、この判決それ自体は、いかなる意味も有しない。息子はこの判決を無視することができるかもしれない。しかし、息子がみずからこの判決を執行することによって初めて、この判決に意味が付与されることになる。まさにこの判決は、意味についての転覆破壊活動であるが、それは意味をふたたび新たに生み出すのである。判決にそのような意味が付与されることによって、同時に、テキストの全体構造の意味が転倒破壊される。すなわち、手紙の意味は、判決の意味によって、ふたたび放棄される。手紙の意味は、主人公の婚約について友人に語られる点に存するのである。判決の意味は、息子に判決を下す

2) [原注] カラー（Jonathan Culler）の叙述（1988年）は依然として適切である。これより新しいものにボッシナーデ（Johanna Bossinade）の啓発的入門書（2000年）がある。

点に存する。名目上、息子には、死刑の判決が下されるが、それはもちろん法令集の及ばぬ範囲のことであって、家庭内の権力関係によって置き換えられるのである。本来はしかし、死刑判決に何らかの意味を与えるために、息子に有罪判決が下されるのである。

ゲオルク・ベンデマンは、婚約からみずからの死まで、緊張の円弧を描くように、非常に短い期間——語られる時間 (die erzählte Zeit) と語りの時間 (Erzählzeit) はほぼ一致している——の中で、生き抜かなければならない。その円弧の軌跡は、新しい家族の誕生から古い家族の消滅にまで及ぶ。ゲオルク・ベンデマンは、中間的部分を構成し、それを起点に、具体例として、家族の歴史についての二つの選択肢が検討される。すなわち、愛か死か、成功か挫折か、権力獲得か権力喪失か、これらは結局のところ、構築と破壊を意味するのである。

カフカのテキストは、手紙から判決へと、緊張の円弧を描いて運動を繰り返す。その中で、ディコンストラクション自体が行われ、その結果、それが読者の受容経験となる。権力関係の激変が行われるやいなや、それと同時に意味のディコンストラクションが行われる。息子が権力を失うやいなや、読者はテキストの意味を失うのである。そのことによって、テキストは、自省的に大きくカーブを描くことになり、次には、その軌跡に、より正確に関心を払わなければならなくなる。ディコンストラクションは、文学的テキストが、記号と意味を構築し、破壊することに注意を払う、そして、このプロセスを、正確に、受け入れる文学テキストに委ねる。ディコンストラクションは、一方において、テキストに基づき、意味と記号について構築と破壊を検出する処理であるが、同時に、テキスト自体の中で行われる——これがディコンストラクションの観点なのだが——プロセスそのものである。〔ラテン語におけるように〕 (目的語的属格 [genetivus obiectivus]) を含むテキストのディコンストラクションは、 (主語的属格 [genetivus subiectivus]) を含むテキストのディコンストラクションでもある。テキストのディコンストラクションは、テキストによるディコンストラクションである。一つには、ディコンストラクションするのは読者である。もう一つには、テキスト自体がディコンストラクション的である。

そして、まさしくこのことによって、カフカのテキストはディコンストラクション的なテキストとなる。すなわち、テキストが記号秩序を構成し、記号秩序がテキストを判別するという意味での記号秩序 (Zeichenordnung) があり、テキスト自体が、その記号秩序を無効化し、転覆破壊させることによって、意味と記号をディコンストラクション化することを、われわれはカフカのテキストに基づいて検出することができる。こうして、判決の意味は、手紙の意味喪失となる。このテキストを締めくくることによって、解釈とディコンストラクション的読書のために、初めて開示される究極の意味は、意味自体の否定ということである。したがって、意味は、意味の否定の媒体の中でしか手に入らないものである。さらにこうも言えるかもしれない。意味は、絶対的否定の媒体の中で、つまり、死そのものの媒体の中で手に入るものだ、と。手紙と判決は、このようにディコンストラクション的緊張の中にあり、それは同時に、解釈をディコンストラクション化する。それゆえに、『判決』ということばが、テキストの平面と、解釈の平面とに、同様に配分される

のは不思議なことではない。テキストの中の父の判決が、息子の死によって明らかになるだけでなく、そのうえ克服されもするという意味破壊/意味脱構築【Sinnde(kon)struktion】を表示するように、カフカの『判決』も、意味破壊/意味脱構築となり、それは解釈を不可能にするだけでなく、克服もするのである。

構造主義的記号モデルと解釈の方法としてのディコンストラクション？

「意味」と「記号」という概念は、異なる方法論的文脈から生じる、したがって、先行するものの位置についてのディコンストラクションの視座から見た二重の取り消しを可能にする。意味は解釈学的概念であり、同時に基本カテゴリーである。意味は理解の前提であるが、しかしそれと同時に、理解の成果でもある。理解が手続きとして行われる場合に、われわれは解釈について話すことができる。ディコンストラクションは、解釈についての批判によって、解釈学とは根本的に対照をなす。もちろんその際注意しなければならないことは、ディコンストラクションは意味のカテゴリーを単純に追放したり、否定するのではなく、単に意味を確認することによって、「直接的な」意味を否定するのである。われわれは、ディコンストラクションを、性急に破壊と混同してはならない（Gumbrecht, 1988年, 95ページを参照せよ）。

このメカニズムは、記号概念に還元される。記号概念に基づくと、ディコンストラクションは構造主義に隣接するものである。それゆえ、「ポスト構造主義」³⁾とも呼ばれる。ディコンストラクションとそれから派生した「ポスト構造主義」の記号理論的基盤を、そして、「ディコンストラクション」という処理自体を、筆者は言語規則として推薦する。ポスト構造主義は、意味作用（Signifikation）に包括的に疑問を呈する限りにおいて、構

3) [訳注] ポスト構造主義：「1960年代後半から70年代後半にかけてフランス思想界に登場した新しい思想運動。[……] ポスト構造主義は、構造主義を批判的に継承しつつそれを乗り越える思想運動である。[……]」

構造主義は哲学ではなくて何よりもまず科学の方法である。社会と文化を理解する方法論として構造主義は提起されたが、それは同時に西欧近代の主流的見解であった人間主体中心主義（認識の原理にして世界存在の原理たる〈主観性〉の哲学）を事実上解体させるものであった。主体が構造をつくるのではなく、構造が主体をつくる。個別的主体は構造の担い手、諸関係の結節点にすぎない。[……] 構造主義は、認識論的レベルでは〈主体＝実体主義〉を解体させ、諸関係の構造化の視座を打ち出したが、その構造概念は依然として閉じた構造であり、[……] 閉鎖体系を構築して構造を主体化させる傾向をもっていた。

ポスト構造主義は、構造主義がなおとらわれている実体主義的傾向、閉じた体系を形成する傾向、要するに暗黙裡の形而上学的な思考の可能性の条件を模索することになる。[……] 形而上学によって抑圧、隠蔽、排除されたものはデリダにとっては〈差延〉（ディフェランス）である。〈差延〉を排除し隠蔽する思考をデリダはロゴス中心主義または現前中心主義と呼ぶ。デリダ的脱構築も[……] 思想自身が自己解体的に現実実践に接近する広義の倫理の表現であるといえよう。内面的主体への内在も彼岸への超越も拒否して、今、ここでの生のよりよき現実化をめざす抵抗の思想、それがポスト構造主義である。」

（木田元・丸山圭三郎・栗原彬・野家啓一編『コンサイス20世紀思想事典』三省堂 1995年 740ページ以下）

造主義的記号モデルを先鋭化するものである³⁾。

こうして逆説的な出発状況が作られる。ポスト構造主義を説明しよとする者は、言語とその記号に奉仕しなければならない。しかし、ポスト構造主義は、言語と記号によって、われわれを繰り返し幻惑させるイメージに依拠している。われわれは、言語と記号を手段として、われわれの世界を叙述し、模写し、具象化することができるかもしれない。われわれは、事物と実情を言語的として説明することができるかもしれない。ただし、言語はそれを厳密な形で成し遂げることはできないのだが。しかし、まさにそのことに、ポスト構造主義は異議を唱えるのである。

構造主義的記号モデルは、ジュネーブの言語学者フェルディナン・ドゥ・ソシュール (Ferdinand de Saussure) によって、表示するもの (Bezeichnendes [/signifiant]) と表示されるもの (Bezeichnetes [/signifié]) との統一、聴覚映像 (Lautbild) と表象映像 (Vorstellungsbild) との統一、記号表現 (Signifikant/signifiant / 記号作用部 / 能記) と記号内容 (Signifikat/signifié / 記号意味部 / 所記) との統一が定義づけられた。このことは、特に、記号表現と記号内容とのこのような「明確化」が、言語全体 (langue) を飛び越えて、急激に起こることによっても明白となる。マンフレート・フランク (Manfred Frank) は、「記号表現も記号内容も、いまや一気に生まれる作用によって、ラングの中心に踏み入る (Ins-Mittel-Treten der langue)」ことについて語っている (Frank, 1983年43ページ)。記号表現も記号内容もそれ自体単独で生まれるのではなく、相互に依存している。聴覚形式と表象映像は、同時的に根源的に明確化される。

一つの言語内容が、いったいどのようにして一つの言語表現になるのか、という問いに対して、われわれは、分類に優先する命名行為 (Taufakt) によっては答えられない。むしろ、それは、その他の言語表現すべてである、すなわち、厳密に言えば、ほかのすべての言語表現との差異 (Differenz[en] [/différence]) である。ソシュール (1967, S. 136f.) の場合、こう述べられている。「言語は、一部の要素が他のすべての要素と依存関係にある体系である。他の存在と同時に存在するものからのみ生じる存在の妥当性と価値に従う体系である [……]」。言語表現の言語内容に対する積極的な関係は、一つの閉ざされた体系の中の、あらゆる他の言語表現の暗黙の否定によって生じる！ 一例を挙げてみよう。すべてが「木」(Baum) を意味しているのではないことを私が知っているとき、私は「木」という概念が意味するものを定義することができるにすぎない。「これは一本の木である」(Dies ist ein Baum) という命名行為は、もはや役に立たない。というのは、概念は、それが「椅子あるいは机あるいは花ではない……」(nichtr einen Stuhl oder Tisch oder eine Blume...) ということを表示することによってのみ、満たされるにすぎないからだ。

この箇所では、フランスの哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida) が急進化を推し進めて、ポスト構造主義の根本思想を定式化する。記号表現と記号内容との間には、しかるべき明白に一致するところはもはやまったくない。たとえ、われわれが、あらゆる差異を

3) [原注] これに加えて、フランク (Manfred Frank) の書を参照せよ。

一々点検しても、われわれは、明白に一致するものには出会わない。デリダは、意味作用の閉ざされた体系という理念を拒絶する。逆に、もはや個々の意味作用を保証することのできない体系の開放性を、記号構造の無限化へと導く。厳密に言えば、デリダとともにこう言ってよいかもしれない。すなわち、記号内容などはまったく存在しないのだ、と。開かれた体系内における記号表現の諸差異があるにすぎないのだ。すなわち、「木」(Baum)があるのではなく、「非—椅子」(Nicht-Stuhl)などがあるにすぎないのだ。一つの記号表現は、差異によって、次の異なる記号表現を指示する。しかし、その記号表現にも同じことが適用される。すなわち、このことは、諸記号表現および諸指示の無限連鎖を意味していることになる。つまり、それは「椅子」(Stuhl)にも適用されることになる。つまり、「非—机」(Nicht-Tisch)は、「机」(Tisch)にもまた適用されるのであり、つまりは、「非—花……」(Nicht-Blume)にも適用されることになる、等々。デリダは、このために、新造語を考案し、それを差延(différance)⁴⁾と命名し、そのことばを用いて書いている

- 4) [訳注] 差延：①「フランス語の自動詞 *différer* [異なる] の名詞形 *defférance* [差異] に他動詞 *différer* [延期する] の現在分詞 *différant* を融合させた形。〈差異〉と〈延期〉の両方の意味を同時にもたせながらどちらにも還元されない、両者の中間の、未決状態の不安定な意味をも暗示する。すなわち、いかなる言語的要素にも実証的な意味はなく、あるのはただ、他の要素との差異から生じるいい効果だけであり、意味作用は一つの記号から次の記号へと際限なく差延させられるために、意味の充満ないし意味の現前はけっして訪れることがない、というデリダは、ソシール言語学のキーワードを利用したこの造語によって、語およびテキストの決定不可能性と、シニフィアンが言語の体系の中で経る差異化の戯れを前景化する。」

(川口喬一/岡本靖正編『最新 文学批評用語辞典』 研究社 1998年 108ページ)

- ②「デリダによる造語。自己同一的な実態や直接的な現前を価値の根源に据えた伝統的形而上学が、実はそれが消去してきた外的な諸々の「差異」によって逆に生み出され、支えられてきたことを示す。「異なる」「ずらす、遅らせる」の両義を持つ動詞 *différer* の現在分詞から造られた。」

(『小学館 ロベール仏和大辞典』 小学館 1999年 763ページ)

- ③「差異、違いを意味するごくありふれたフランス語 *différence* は、多くの哲学者・作家において(とりわけ〈他者〉とのかかわりにおいて)用いられているが、この語の動詞形 *différer* に含まれる〈遅らせる、延期する〉という」意味を踏まえて、*différance* [差延] という、同音異綴語を造り出したのが J. デリダである。その根底にあるのは、〈エクリチュール*〉〈痕跡 [トラース]〉といった語における同じ認識、すなわち、存在者が自己自身といささかのずれ(違い、遅延)もなく自己現前することは決してない、したがって純粹の起源というものはなく、起源においてすでに自己には自己との隔たり、自己への遅延がある、という認識である。差異(*différence*)におけるこの遅延の相ないし作用を強調し明示するために、デリダは *différance* という新語の発明をいわば迫られたわけである。」

(木田元・丸山圭三郎・栗原彬・野家啓一編『コンサイス20世紀思想事典』 三省堂 1995年 362ページ以下)

- ④「*différer* という動詞は、他動詞としては「延期する」を、自動詞としては「異なる」を意味し、この動詞からつくられた名詞 *différence* には「差異」の意味しかなく、「延期」の意味は含まれていない。デリダはこの動詞の現在分詞 *différant* から新たに *différance* という名詞形を導き、これに「差異」と「遅延」の両義を含ませる。*différence* と *différance* は綴り字の上では *e* と *a* の相違があるが、発音の上では、つまり音声的には同じなので見分けがつかない。このことは *différance* のあ

(この「ことばの元になった単語の」正確なスペルは *différence* 「差異」であろう)。それは、空間的ならびに時間的な見方をすると、記号構造ないし記号プロセスにおける差異の完結することのない連鎖、無限の延期を意味している (Derrida, 1988年 a, 35ページ)。

そういうわけで、言語は根本的に差異的である。言語の根本原理は差異であり、同一性ではない。その意味するところはすなわち、唯一の言語的・意味論の基本要素も、語も、概念も、テーマも、人物も、物語も、テキストも、あるがままのものではなく、まさにそうではないものなのである。人は、つねに、自分の出所ではない他のものを参照するように指示される。たとえ、あらゆる差異が出発点とする起源をどんなに探しても、——デリ

る特性を示唆している。訳語としてはやむなく「差異」と「差延」から一字ずつとって「差延」という新語をつくったが、これでは原語にあった同音異義の戯れが完全に消えてしまう。」(ジャック・デリダ『ポジション』高橋弁昭訳 青土社 1984年 193ページ以下)

* **エクリチュール** [*écriture*] : 書き進む行為/書く行為/書くこと/書きこみ/書かれたもの/書きもの/書き言葉/文字言語/文字表記/記号表記/言語表記/文章表現/作品/文字/書字/表記/記述/書記行為/書法/[差異を刻み込むこと、差異を書きこむことという意味を含んだ場合には] 書差あるいは書差作用あるいは刻差などと訳される。

①: 「書くこと、書かれたものを意味する、フランス語としてもごくありふれたこの語 (英語 *writing*) は、およそ1960年代から、フランスの文学、批評等の分野における一種のキーワードとなり、ほとんどあらゆる人によって実に多様な意味で使用、ときに濫用されるようになった。そのため、この語の意味的負荷はあまりに巨大になり、外国語に翻訳することが困難になっている。しかし、この語のそうした来歴は、とりわけ、2つの名に強く結びついているといつてよい。

一人は R. バルトである。『エクリチュールのゼロ度』(1953)において、バルトは、〈個人的特異語法〉をさすものとして〈エクリチュール〉という語を用いたのである。

もう一人は J. デリダである。『グラマトロジーについて』(1967)において、デリダは、それまで西欧の思考においてほとんどつねに〈口頭言語 [パロール]〉の不完全な代理であり補いであるとなみなされてきた〈文字言語 [エクリチュール]〉を根源的に考え直すことを提唱する。彼はなにも(よく誤解されがちのように)パロールとエクリチュールの序列を逆転し、エクリチュールの復権をはかったのではない。そうではなしに、〈純粹な起源〉と考えられてきたパロール、ないしその支えとしての声において、すでに自己を自己から分かちつはたらきである〈痕跡 [トラース]〉があると想定しなければ、いっさいの表徴=記号(シーニュ)は成立しない、として、このような起源における分割とその痕跡を〈原 [アルシ]=エクリチュール〉あるいはたんに〈エクリチュール〉と呼んだのである。」

(木田元他編 前掲書 155ページ以下)

②: 「フランス語で書記行為、書法。その結果としての記号などを総称する用語。(1) この語を広めたバルト, R. の『零度のエクリチュール』においてエクリチュールとは、規則・習慣の体系としての「言語」と、個人的・身体的な「文体」との間で働く両義的な機能として、個人を社会・歴史へと接続する媒体である。(2) デリダ, J. は、プラトン以来の西欧形而上学において、生き生きとした自己現前として特権化されていた音声言語に対して、記憶の喪失をもたらす危険な技術的補助とされるエクリチュールがもつ、不在、遅れ、空間化、死などの働きが、実は前者〔音声言語〕を内側から構成していることをことを指摘し、その働きを「原 [アルシ] エクリチュール」と呼ぶ。」

(見田宗介顧問, 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂 平成24 (2012) 年)

ダに従えば——空をつかむであろう。連鎖は、前後に無限にとめどなく続く。

そこからは、解釈実践のためのラジカルな一貫性が明らかになる。すなわち、意味は、終結しないで無限に続く指示構造の中での常なる移行の瞬間としてのみ把握できるにすぎない。それゆえ、われわれが、解釈で、意味を「探し求め」（aufspüren）ようとすると、意味に出会うことはなく、意味の痕跡に出会うのであり、その痕跡は、それ自体、ある痕跡に至るという風に、意味の痕跡の痕跡というふうに連なっていく。しかし、われわれは決して意味に出会うことはない。痕跡は終結することがないのだ。

デリダにとって、これがエクリチュール（écriture/Schrift/文字/文字言語）の効果である。デリダに従えば、エクリチュールは数世紀にわたって声（voix/Stimme/音声）に対して低く評価されてきた。声が根源的なものであり、エクリチュールは単に声と意味のための記憶媒体にすぎない、と。声は話すものの現前と常に結びつけられている、と（Derrida, 1983, S. 26）。反対に、エクリチュールは不在が調整されなければならないときにだけ登場するにすぎないのだから。しかもそれは、発話者の不在と、それについて語られる発話者の不在とが調整されなければならないときにだけ、なのだ。声のこの優位——デリダなら形而上学的優位と言うかもしれない——に、現前の優位（der Vorrang der Präsenz）が反映されている。人が何かを発話すると、この瞬間に、発話したことの意味が「現前して」（präsent）いる。発話された語は、その語の意味を再現する、そして、それが、西洋文化の中心に立つのだ。声のこの優位と声における意味の現前を、デリダは、西洋形而上学的「音声中心主義ないしはロゴス中心主義」（Phono- bzw. Logozentrismus）（同上書25ページ）と名づけるが、これは記号表現に対して一つの記号内容が存在するという以外に何ものをも意味しない。例えば、神、理性、主語などあらゆる記号内容の中心に位置する一つの超越的記号内容が、記号表現のために、記号内容の現前の保証を表現する⁴⁾。

これに対して、ポスト構造主義は、「構造の構造的性」（Strukturalität der Struktur）という理念を対立させる。すなわち、いかなる構造も確定した根本要素と結合しているのではなくて、つねに他の構造を指示しているということである。一つの記号内容の結合力がまさに欠落しているがゆえに、終結することのない差異の開かれた体系の中で、記号構造の無限化に至る。すなわち、「超越的記号内容の不在が、記号表現の領域と戯れを無限へと拡大するのだ」（Die Abwesenheit eines transzendentalen Signifikates erweitert das Feld und Spiel des Bezeichnens ins Unendliche）（Derrida, 1976年 422ページおよび424ページ）

この構想から、文学解釈のための幅広い結論が生まれる。それはまず、テキストについてのわれわれのイメージにかかわるものである。どの記号もつねに際限なく他の記号を指示するように、どの個々のテキスト（われわれが、個々のテキストとして認定するようなもの）も、記号らしきもの（というのは、実際、テキストはほかのテキストからは生まれ

4) [原注] デリダ（Jacques Derrida, 1976年424ページ）とデリダ（1988年b, 56と771ページ）を参照せよ。

ないからである)を基盤にして、繰り返し他のテキストを指示する。その上、デリダは、すべてを包括するテキスト——「普遍的テキスト」(texte général)⁵⁾——についても語りえる。解釈は、対象としてのテキストを踏まえた上でそれについて(「踏まえ上でそれについて」という言葉には、位階/序列というニュアンスが感じ取れる)、解釈として意見を述べることはできない。「したがって、対象言語に対するいかなるメタ言語も存在しない」(Es gibt also keine Metasprache zu einer Objektsprache)。というのは、どの言語的発話も、常に指示関連の中にあり、そういう位階構造が明確にすることを許容しないからである。したがって、ポスト構造主義にとって、従来の解釈学的意味における解釈は存在しない。それゆえ、解釈は、もはや「正しい」とか「誤っている」というふうに分類することができる再構築(Rekonstruktion)ではない。単に、テキストがすでに行っていることのディコンストラクションにすぎない。すなわち「解釈のディコンストラクション」である。それにともなって、ディコンストラクションが激しく身を守る。ディコンストラクションが方法や体系と表示されるとき、固い規則、前提、一義的規定できる基盤として認識されるとき、むしろ、ディコンストラクションは自分を戯れや実践と見るだろう。そのことによって、読者の役割は特別な意味を獲得する。すなわち、ロラン・バルト(Roland Barthes)は、『テキストの快楽』(*Die Lust am Text*, 1973)の中で、意味の破壊活動の(ポスト構造主義的な)可能性の上に成り立つ、読者による無秩序な構想概念を描いている。意味の破壊活動は、読書にとって決して余計なことではない。というのは、「読書という行為」(*Akt des Lesens*)は、ディコンストラクションそれ自体が行われる場所となるからである(Culler, 1988年第1章を参照せよ)。

構造主義は、記号に基づく秩序を生み出す二元的、二価的図式をあらかじめ設定するさまざまな対立構造(Oppositionsstrukturen)に注意を向ける(例えば、「椅子」という概念とそれが表示するものとの対立のような)。ここに、ディコンストラクションの主要な活動点の一つがある。すなわち、ディコンストラクションは、記号のような機能が発揮されている中で、ディコンストラクションを見抜き、その効力をなくすために、特別な方法で、そのような対立を唆唆する。これらは、再構成されるのだが、しかし、これらを同時にディコンストラクション化するためだけに再構成されるのである。ディコンストラクションは、独自の展開をしながら、そのようなさまざまな対立、例えば、記号表現と記号内容、声と文字、中心と周辺、閉ざされたものと開かれたもの、その他多数の間にある対立を採取する。しかし、まさしくテキストの読書行為においても、テキストとしてインストールされたそのような対立物が、ディコンストラクションへと導くために、見つけれられるものなのだ。

【後半の訳稿(2)に続く】

5) [原注] この用語は、ドイツ語では、普遍性を有するテキスト」(Text im allgemeinen)あるいは「普遍的テキスト」(allgemeiner Text)というふうに、不十分な形でしか表現できない。

【テキスト】

Oliver Jahraus: Dekonstruktion. Zeichen-Verschiebung: vom Brief zum Urteil, von Georg zum Freund. Kafkas *Das Urteil* aus poststrukturalistischer / dekonstruktivistischer Sicht. (1) In: O. Jahraus und Stefan Neuhaus (Hrsg.): Kafkas »Urteil« und die Literaturtheorie. Zehn Modellanalysen. Universal-Bibliothek Nr. 17636. Stuttgart: Philipp Reclam jun. GmbH & Co. 2002, S. 241-251.

テキストの訳文中, [……] 内は訳者注。

【参考文献】

Franz Kafka: *Gesammelte Werke in zwölf Bänden*. Nach der Kritischen Ausgabe herausgegeben von Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M.: Fischer Taschenbuch Verlag GmbH 1994.
Erich Heller und Jürgen Born (Hrsg.): *Franz Kafka. Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit*. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1970.

Bettina von Jagow und Oliver Jahraus: *Kafka-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht GmbH Co. KG. 2008.

フランツ・カフカ『決定版 カフカ全集』全12巻 新潮社 1980-1981年

下宮忠雄・川島淳夫・日置孝次郎編著『言語学小辞典』 同学社 1988年

脇坂豊・川島淳夫・高橋由美子編著『記号学小辞典』 同学社 1994年

木田元・丸山圭三郎・栗原彬・野家啓一編『コンサイス20世紀思想事典』 三省堂 1995年
川口喬一・岡本靖正編『最新 文学批評用語辞典』 研究社 1998年

今村仁司・三島憲一・川崎修編『岩波社会思想事典』 岩波書店 2008年

中村雄二郎『術語集 気になることば』 岩波新書 1984年

前田英樹『沈黙するソーシャル』 講談社学術文庫 2010年

丸山圭三郎『ソーシャルの思想』 岩波書店 2003年

丸山圭三郎『ソーシャルを読む』 講談社学術文庫 2012年

高橋哲哉『デリダ』 講談社学術文庫 2015年

森脇透青/西山雄二/宮崎裕助/ダリン・テネフ/小川歩人『ジャック・デリダ 「差延」を読む』 読書人 2023年

ジャック・デリダ『声と現象』 高橋允昭訳 理想社 1984年

ジャック・デリダ『声と現象』 林好雄訳 ちくま学芸文庫 2005年

(Jacques Derrida: *La voix et le phénomène – Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*. Paris: Presses Universitaires de France 2003; dt. *Die Stimme und das Phänomen. Einführung in das Problem des Zeichens in der Phänomenologie Husserls*. Aus dem Französischen von Hans-Dieter Gondek. Frankfurt a. M. 2003)

ジャック・デリダ『エクリチュールと差異』(上) 若桑毅/野村英夫/阪上脩/川久保輝興訳 法政大学出版局 1985年

ジャック・デリダ『エクリチュールと差異』(下) 梶谷温子/野村英夫/三好郁朗/若桑毅/

- 阪上脩訳 法政大学出版局 1985年
- ジャック・デリダ『エクリチュールと差異〈新訳〉』合田正人/谷口博史訳 法政大学出版局 2013年
- (Jacques Derrida: *L'écriture et la différence*. Paris: Éditions du Seuil 1967; dt. *Die Schrift und die Differenz*. Übersetzt von Rodolphe Gasché. Frankfurt a. M.: Suhrkamp 2023)
- ジャック・デリダ『根源の彼方にーグラマトロジーについて』上 足立和浩訳 現代思潮社 1984年
- ジャック・デリダ『根源の彼方にーグラマトロジーについて』下 足立和浩訳 現代思潮社 1984年
- (Jacques Derrida: *De la grammatologie*. Paris: Les éditions de Minuit 1967; eng. *Of Grammatology*. Translated by Gayatri Chakravorty Spivak. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press 1984)
- ジャック・デリダ『哲学の余白』上 高橋允昭/藤本一男訳 法政大学出版局 2022年
- ジャック・デリダ『哲学の余白』下 藤本一男訳 法政大学出版局 2022年
- (Jacques Derrida: *Marges—de la Philosophie*. Paris: Les éditions de Minuit 1972)
- ジャック・デリダ『ポジション』高橋允昭訳 青土社 1984年
- (Jacques Derrida: *Positions. Entretiens avec Henri Ronse, Julia Kristeva, Jean-Louis Houdebine, Guy Scarpetta*. Paris: Les éditions de Minuit 1972; dt. *Positions. Gespräche mit Henri Ronse, Julia Kristeva, Jean-Louis Houdebine, Guy Scarpetta*. Hrsg. von Peter Engelmann. Wien: Passagen Verlag Ges. m. b.H. 2009)
- ジョナサン・カラー『ディコンストラクション』(Ⅰ) 岩波現代文庫 2009年
- ジョナサン・カラー『ディコンストラクション』(Ⅱ) 岩波現代文庫 2009年
- (Jonathan Culler: *On Deconstruction. Theory and Criticism after Structuralism*. 25th Anniversary Edition. Ithaca, New York: Cornell University Press 2007)
- ガヤトリ・C. スピヴァク『デリダ論』田尻芳樹訳 平凡社 2023年
- (Gayatri Chakravorty Spivak: *Translator's preface*. In: Jacques Derrida: *Of Grammatology*. G. Ch. Spivak. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press 1984)
- ジェフ・コリンズ『デリダ』鈴木圭介訳 ちくま学芸文庫 2008年
- フィリップ・フォルジェ編『テキストと解釈』轡田修/三島憲一他訳 産業図書 1990年
- (Philippe Forget (Hrsg.): *Text und Interpretation*. München: Wilhelm Fink Verlag 1984)
- ジュリア・クリステヴァ『テキストとしての小説』谷口勇訳 1985年
- (Julia Kisteva: *Le texte du roman*. The Hague/Paris: Mouton Publishers 1973³)
- ポール・ド・マン『理論への抵抗』大河内昌/富山太佳夫訳 国文社 1992年
- (Paul de Man: *The Resistance to Theory*. Minneapolis: University of Minnesota Press 1986)
- ポール・ド・マン『盲目と洞察 現代批評の修辞法における試論』宮崎裕助/木内久美子訳 月曜社 2012年

(Paul de Man: *Blindness and Insight. Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism.*
Minneapolis: University of Minnesota Press 1983)

『理想』「特集－デリダ」6月号 理想社 1984年

『國文学－解釈と教材の研究』「現代批評のキーワード」 學燈社 1991年